去年負けた時点で、次は絶対に優勝しよう、と決めた

Yuto・Kizukuri きづくり・ゆうと 愛工大名電高 木造勇人

男子ジュニア決勝。ゲームカウント2対1。スコアは13-12。悲願の初優勝まであと1点だった。緒方のサービスをしっかりストップレシーブ。緒方の3球目攻撃を封じると、木造の4球目攻撃。回り込みフォアハンドドライブがストレートに決まる。その瞬間、普段は大人しい木造だが、両手を高く突き上げ、喜びを爆発させた。

高校生最大の目標であるインターハイ。木造は、ダブルスに優勝。シングルスは決勝に進出。ゲームカウント3対3の8-5でリード。1年生チャンピオンの誕生を予感させた。しかし優勝を意識したのか、そこから消極的なプレーをしてしまい逆転負け。悔いの残る準優勝となった。

迎えた全日本選手権ジュニアの部。インターハイの結果から、木造はスーパーシード。3回戦から登場した。

「はじめてのスーパーシード。いつもと勝手が違う。慣れていないというか、変な緊張感がありました。とにかく思い切って、声を出してプレーしなければいけないと思っていました」と語る。

順調に勝ち進み、ベスト4決定戦では、先輩・松山祐季（愛工大名電高）と対戦する。

「練習試合の結果は五分五分。勝つ時でも3対2。ただ今回は戦術というか、何をすれば良いかイメージすることが出来て、勝つことができました」と、準決勝進出を決める。

決勝前夜。ゲンを担ぐために、ゲンの良いユニフォームを着ていいですか、と連絡が入った。「もちろん」と返せば、絶対に優勝します、と強い決意が返ってきた。

迎えた決戦の日。木造は、ジュニアの試合の前に一般の部、ダブルスで敗戦。失意のまま迎えたジュニア準決勝の伊丹戦。気持ちの切り替えがうまく行かなかった。

「切り替えよう、切り替えよう、と思っていたのですが、どこかで引きずってしまっていたと思います。相手に0-2とリードを許す展開。この時『みんなが見ている。情けない試合は出来ない。まだ負けていないし、ゼロからやり直そう』そう思いました」

そこから木造のプレーは変貌。3、4ゲーム目を取る。流れは完全に木造。しかし勝負はそう簡単にはいかない。5ゲーム目は凡ミスが重なり、気が付けば0-5。厳しい流れでチェンジコート。

「凡ミスが重なっていたので、凡ミスをなくすようにプレーしました。とにかく諦めない。これだけでした」

点数を考えずプレーした木造。気が付けば、10-9とマッチポイントを握る。しかしここでもロングサービスをミスするという凡ミスを犯す。しかしなんとか勝利、決勝に駒を進めた。

決勝の相手は緒方遼太郎（JOCエリートアカデミー／帝京）。準決勝の相手同様、「チキータ」を得意とする選手だ。

「準決勝が終わり、決勝まで練習場で準決勝の修正をしました。それがうまく行ったので、第1、2ゲームを取ることができました」と木造。

勢いは完全に木造。このまま優勝か、と思われた。しかし3ゲーム目から木造は消極的になってしまう。

「3ゲーム目を落とし、インターハイを思い出してしまいました。このまま負けてしまうのではないか、と。ただここで弱気になっても仕方ない。攻める気持ちを持たなければ勝てない、そう思えたんです」。4ゲーム目もリードを許し、マッチポイントを握られるも、最後まで攻めて優勝をもぎ取る。特に優勝を決めた最後の1本は小学生から課題としていた回り込み攻撃での得点。悪夢を振り払った瞬間であった。

小学校1年生から卓球をはじめる。字を書く、箸を持つのは右手。ラケットも最初は右手で握る。しかし母・清子さんの勧めにより左手に持ち替え、卓球を続け、今では違和感がないそうだ。

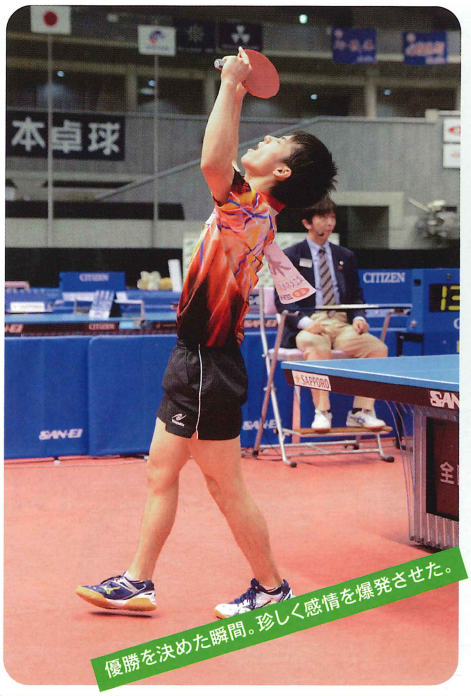
普段から練習が大好き。ビデオ研究も好きで、左利きのトップ選手のビデオ見ては、練習に役立てている、と話してくれた。

「全日本選手権では、名電の仲間、愛工大の先輩、卒業生の先輩の応援が凄く力になりました」と話してくれた。

大きな夢は、2020年の東京オリンピックに出場すること。直近では、3月に行われる全国高校選抜の団体戦で優勝し、夏のインターハイで3冠王になること、と話してくれた。

小さい頃から、才能溢れる左腕として注目されていた木造。全日本選手権優勝、というタイトルを手にしたことにより、さらに覚悟が芽生えたようだ。

「全日本選手権の一般の部で勝てるようにしないといけませんね」と、一般の部のスーパーシード選手の試合を観客席で見ながら話してくれた。



優勝を決めた瞬間。珍しく感情を爆発させた。